

4 まちは舞台、人が主役

～静岡市が描く「まち劇場」の未来～



近藤 有加
KONDO Yuka

静岡市観光交流文化局文化政策課
まち劇場推進係/主査

丸山 達也
MARUYAMA Tatsuya

静岡市観光交流文化局文化政策課
まち劇場推進係/主任主事



どこかにまち劇場HP

静岡市では芸術文化を起点としたイベントをまちなかで開催し、その効果を評価するシステムを構築している。どのような軸や指標で評価しているのか、劇場を飛び出したパフォーミングアーツが静岡市の目指す将来像に対してどのような効果をもたらしているのかを解説する。

「まち劇場」のはじまりと思い

静岡市のまちづくりは、江戸時代の徳川家康公による駿府城下町整備が礎となっています。駿府城を中心に武家屋敷、商人や職人の居住地、寺院などが配置され、東西交通の要衝として人々の交流によって栄え、当時の日本の政治・経済・文化の中心地となりました。

現在の人口は約67万人、東京と名古屋の中間に位置し、東海道新幹線や東名高速道路を備え、現代でも多様な人々が行き交う本市は、「文化芸術を活かしたまちづくり」に取り組んでいます。

その中心となるのが、「この世界は、すべて舞台だ」というシェイクスピアの一節を旗印に掲げた、「まち劇場」という文化政策です。そのルーツは

1992年に始まった「大道芸ワールドカップin静岡」にあります。30年以上続いてきたこのイベントは、市民がパフォーミングアーツを気軽に楽しむ文化を根付かせました。この文化的土壌を背景に、公園や路上といった公共空間を、大道芸や演劇、音楽といったパフォーマンスの「舞台」と見立て、市民・来訪者が日常的に芸術文化に触れる都市環境の実現を目指しています。

その根底には、「まちは舞台、人が主役」というコンセプトがあります。本市は他の地方都市と同様に、人口減少、特に若者の流出が大きな課題となっています。「まち劇場」では多彩な表現がまちにあふれる中で、多様な人たちの生き方にスポットが当たり、各人の個性を認め合う寛容性を養うこと、そして「誰もが自分らしく生きられる舞台」としてのまちづくりを進めています。ロゴマーク「ON STAGE SHIZUOKA」は、街角や公園など公共空間が「ステージ」となること、年齢・性別・障害の有無を問わず誰もが参画できる「舞台」があることを意味しています。

そして、「まち劇場」を象徴する取組として、まち全体を一つの大きな舞台に見立てたフェスティバルが開催され、多くの市民や来訪者を魅了しています（静岡市内で開催されるイベントのうち、芸術文化を起点としたものを「フェスティバル」と称しています）。

本市では「春の演劇×秋の大道芸」として文化芸



写真1 まち劇スポット（出会いの像レプリカ）



写真2 ストレンジシード静岡2025（鈴木ユキオプロジェクト）



写真3 ストレンジシード静岡2024（CO.SCOoPP）



写真4 大道芸ワールドカップin静岡2024（会場の様子）
©大道芸ワールドカップ実行委員会



写真5 大道芸ワールドカップin静岡2024（市民クラウン）
©大道芸ワールドカップ実行委員会

術分野での静岡市ブランドを強化する取組を行っています。

Shizuoka せかい演劇祭・ストレンジシード静岡（毎年4月下旬～5月上旬開催）

SPAC（公益財団法人静岡県舞台芸術センター）が制作する世界水準の舞台と、世界の優れた演劇作品を招聘する「Shizuokaせかい演劇祭」。その一方で、フリンジ部門の「ストレンジシード静岡」では、国内唯一無二のストリートシアターフェスティバルとして、国内外のアーティストによる演劇やダンスが公園・路上で展開され、自然や街並みとの調和による「ここでしか見ることができない作品」が生まれ、まさに「まちは劇場」そのものを体感できます。

大道芸ワールドカップin静岡（毎年11月上旬開催）

延べ100万人近くが来場する、日本最大級のパフォーミングアーツフェスティバル。世界中から50

組以上のパフォーマーが集い、多彩な大道芸を披露します。毎年800人以上の市民ボランティアによって運営され、本市の文化的なアイデンティティになっています。

また、本市の特徴的な文化として、「投げ銭」があります。「大道芸ワールドカップin静岡」の初回から導入された「投げ銭」は本市に根付き、観客、アーティスト、そしてまちをつなぐ重要なコミュニケーションツールとなりました。アーティストが「ここからは皆さんの時間です」と呼びかける中、観客が投げ銭で感動を表現する風景は、静岡ならではの特別なものです。観客の感動がアーティストの糧となり、再び静岡に戻ってくる原動力となる。この循環が、本市をパフォーミングアーツのまちとして成長させています。

フェスティバルの価値を「見える化」する取組

本市では、2018年度から5年間、文化庁「国際文

化芸術発信拠点形成事業」の助成を受け、その取組の一つとして「フェスティバル評価システム」を構築しました。このシステムの目的は、2030年に目指す静岡市の将来像に対し、フェスティバルによる文化政策がどのように貢献しているかを「見える化」することです。

評価軸は「文化的価値」「経済的価値」「社会的価値」の3つの価値であり、それらが「市民の姿」「来訪者の姿」「まちの姿」「ビジネスの姿」「世界都市との関係」「環境の姿」という6つの目指す将来像に与えた効果を測定します。

例えば、以下のような組み合わせによって評価が行われました。

- ・ 文化的価値×市民の姿：文化芸術への参加機会の創出、文化的寛容性の向上
- ・ 経済的価値×ビジネスの姿：地域経済の活性化、クリエイティブ産業の促進
- ・ 社会的価値×まちの姿：居心地のよい公共空間、文化芸術都市としての創造性

評価対象は「大道芸ワールドカップin静岡」や「ストレンジシード静岡」をはじめ、市内の主要な文化芸術フェスティバルです。この評価システムの特徴の一つは、来場者だけでなく、スタッフ、アーティスト、地元企業、市民など多様な関係者の意見を幅広く収集した点にあり、例えば「社会的価値×まちの姿」を測る際には、「来場者」「市民」「アーティスト」「スタッフ」の調査結果を掛け合わせるなど、多様な視点での測定を試みました。

まちづくりに関してフェスティバルは有用なのか

評価の結果、フェスティバルが単なる一過性のイベントではなく、市民生活を豊かにし、まちづくりに持続的に影響を与えていることが明らかになりました。

文化的価値： 文化的評価と寛容性の醸成	フェスティバル来場者の満足度と再来訪意欲が高い。文化的寛容性を醸成することに貢献。来訪者・参加アーティストの高い評価を得ている。
経済的価値： ビジネスと雇用への貢献	スタッフはやりがいを感じ、労働対価に課題はあるものの地方都市で非営利文化産業が成立している。
社会的価値： 市民の誇りとまちの賑わい	フェスティバルがまち歩きを促進し、こもりがちな市民が外出するきっかけになっている。来場した市民の約7割が「フェスティバルは地域の誇り」と評価。

また、フェスティバルは「まちは劇場」の理念を具体的に実現する手段の一つであり、多彩な表現がまちにあふれ、多様な人々の個性が認められる「誰もが自分らしく生きられる舞台」としてのまちづくりに資することを数値的に示しました。

本市ではこの結果から、更に多様な人々を巻き込んで輪を広げていくこと、そしてフェスティバルだけでなく日常的なまちづくりの中で文化芸術の力を活かしていくことが、まちの魅力を高めることに繋がると考えています。

評価システムは多面的な効果測定を実現した一方、調査範囲が広く、データの収集と分析に多大な労力が必要となり、継続的な運用が難しいという課題もありました。そのため、現在では各フェスティバルの主催者がこの評価フレームを参考にしつつ、新しい価値測定の方法を模索しています。実験的な取組として、2024年の「大道芸ワールドカップin静岡」では、経済的価値（経済波及効果）とステークホルダーにもたらされる社会的・文化的価値の定量化に取り組み、経済波及効果は約13億円、社会的価値は約35億円、文化的価値は約7億円と算出し、フェスティバルがもたらす総合的な価値を試算しました。これらの算出には非市場財的効果の価値を計測する手法として国土交通省からガイドラインが示されている仮想的市場評価法（CVM：Contingent Valuation Method）を用いました。

フェスティバルから日常のまちづくりへ

今後はフェスティバルにとどまらず、日常的なまちづくりの中で文化芸術をどう活用するかが重要なテーマであり、本市は文化が日常に根付く仕掛けづくりにも力を入れています。

まちは劇場パフォーマンススポット（通称：まち劇スポット）

公園や路上などの公共空間をパフォーマンススペース「まち劇スポット」として、市が認定した「まち劇パフォーマー」が通年でパフォーマンスを行える制度です。2025年3月時点で115組が、市内11か所のまち劇スポットで活動しています。中には「大道芸ワールドカップin静岡」出場を果たしたアーティストも誕生し、アーティスト育成の舞台としての役割も担っています。また、2025年からは日本国内の



写真6 まち劇スポット (ナオキ)



写真7 まち劇スポット (ナオキ)



写真8 ストリートピアノ (JR清水駅)



写真9 まちかどコンサート (富士山静岡交響楽団)



写真10 「まちは劇場」プロモーション展開例

都市パフォーマーライセンスとして初の試みとなる「団体ライセンス」を開始し、新たに部活動や文化教室などの団体が「まちは劇場」の取組に参画することになりました。

ストリートピアノとまちかどコンサート

使われなくなった学校のピアノを再整備し、市内4か所に「ストリートピアノ」として設置しています。また、市内で活躍するプロの交響楽団等がまちなかでコンサートを行う「まちかどコンサート」も実施しています。市民が日常的に音楽と触れ合う機会を提供すると同時に、ピアノやコンサートをきっかけにした市民同士の声の掛け合いなどが生まれ、まち全体の魅力を高める役割を果たしています。

いずれの取組も、まちの風景を変えつつあります。赤ちゃんからお年寄りまでがまちの一角に集い、パフォーマンスに歓声を上げ、拍手や投げ銭で感動を伝える風景が、市民の日常に定着してきました。

文化芸術が紡ぐ静岡市の未来

「まちは劇場」という取組は、大道芸や演劇、音楽などの文化芸術をフェスティバルや日常のまちづく

りに活かし、地域の活性化と市民の幸福度向上を目指してきました。

取組開始から10年が経ち、徐々に市民や地域団体との共創関係が構築され、「まち劇パフォーマー」や「まち劇スポット」の増加、民間事業者からの提案によるストリートピアノの開設など、市民と行政が一体となった共創コミュニティが広がってきています。

本市が目指すのは、「誰もが自分らしく生きられるまち」。年齢、性別、障害の有無、国籍を超えて、誰もが表現者になり得る。まちのあちこちでパフォーマンスやアート、人と出会い、驚きや感動が日常にあふれる——そんな風景を、目指しています。「まちは劇場」という理念のもと、公園や路上が「舞台」となり、市民や来訪者がその観客であり、ときに主役にもなる。こうした取組は、人口減少や都市の活力低下への対策であると同時に、「住み続けたいまち」「訪れたいまち」への転換を狙っています。

「まちは劇場」という言葉どおり、まち全体が舞台となり、人が輝く場所へ。その実現に向け、行政、市民、民間が一体となって進めるまちづくりは、これからも続いていきます。